

出會
 知翁鏡
 自再吟本
 三、三、一
 日、日、日

入遠
 1873



正徳13
1873
卷一-4

序

諸葛亮が八陳兵法楠氏が材も皆
決ぶあふ智恵より出ふ計略也
近頃の記述傳授も物々を部
が状亦破あれたとよより多あ終
等々人乃其の志あなるべし
系道は好む時代の器物も今
参出は終やあむし清り是刊



刑政公の山の糸の子孫の中の一の思ひ
たら公の望いを治先祖也心得ば
考ふ家知見の耳有入安とば
一のの故嗟まよ出こうんをまを
也又謀好士志耳みを西
金かひひをやせんがわと
思ひ外集り一野の中は修り
若しをたませる集者独のの

よ無一烈我定むきとも只咄
梅を題せ一交入のましとの
あまをむ河かがら後ませとああ
たまをと順送乃罪な償の序
を認侍教

筆花亭

丙申 季秋朔

對上壽



あそび居るはく、アレハ九十六でうあめろ

料理遠の

川原の小さな根よ古さうた中うのあへんがし一本
柱(こしら)る樂(たの)しき一とあなむの馬(うま)の猫(ねこ)と月
の福(ふく)をあへて彼(か)らしの本(ほん)よれれから根(ね)の
折(お)れあや(あ)わのぶらあ出(い)ぬ危(あや)しうさげあて
むらの猫(ねこ)をあひあへんあへんあへんあへんあへん
あへんあへんあへんあへんあへんあへんあへんあへん
あへんあへんあへんあへんあへんあへんあへんあへん
あへんあへんあへんあへんあへんあへんあへんあへん



あそび居るはく

のあつて。名とよおし。あつても。羽織を。お堀と。帯
 を。堀と。思ひ。着敷を。内廊と。され。が。大よ。か。あ。ひ。
 皆。座。体。の中。よ。たり。ら。あ。や。ど。う。う。思。ひ。ぬ。や。き。ま。て
 たり。ぬ。べ。し。き。う。れ。き。後。の。蛇。の。目。の。け。の。あ。く。ま。れ。の
 べ。し。お。堀。の。あ。く。ま。れ。で。ご。さ。る。

平雲の通海

在。不。中。將。業。平。仙。人。見。馴。ま。ぬ。雲。井。海。く。あ。當。ど。も。な
 し。飛。び。ま。向。ま。よ。人。侍。教。の。天。女。計。人。ぞ。れ。ぬ。は。方。ど。わ
 び。く。ん。ら。あ。り。お。供。の。り。い。い。し。し。は。ま。う。せ。と。は。あ。た。め。い。る。堀

天人。意。示。の。短。織。も。よ。持。て。着。樂。を。あ。あ。お。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 の。た。ん。せ。ん。ご。う。り。き。あ。か。ど。の。出。だ。ま。て。中。お。と。し。遠。し。が。何。と
 ぶ。の。あ。役。た。く。い。か。せ。ん。と。目。合。を。用。あ。あ。と。か。ん。て。あ。よ
 べ。し。は。く。き。き。あ。ひ。と。は。よ。の。て。や。く。と。神。引。が。う。き。あ。を
 ま。で。あ。り。は。る。伏。人。あ。い。い。と。お。び。く。あ。く。ま。り。て。も。あ。ん。あ。う
 ち。と。い。ん。と。を。ぬ。風。う。り。て。あ。あ。下。界。の。人。あ。う。あ。あ。あ。
 し。と。が。ま。れ。い。

行意地八系

田舎人。の。口。人。連。よ。て。八。月。上。面。より。京。都。へ。出。り。各。所。沙。里

おくり見せし一人のいりれりるのりす又日あまはあまの
 石おの秋の月を月あおられぬとていふいふたやうに
 とすふりおのりる 毎あかとして岩を出てはいぞよ八景の
 こころあせんと先二井寺へまほしきまう石山由と秋の
 月おのちうあものやどおえの野の狩の狩よはさんとおよを
 詩うのそこまともる内酒をく酒よ入跡の外月とあられが
 ねくは徒系よ月の隈あきとていふあま及よ石山の名を
 こ月やとてあまおえの月とて遠くあやといふれりる
 今一人とてあまといふ八景のうらでもりや
 お話の道如

おもひおのちよる侍あまのやうにわらふのサバのあまが
 出しませう

此の書は一冊に於ては未だ未だ

新撰忘歌角力 二本 対山 咄云初席全二冊

立春新話大集 常筆其君竹 二席目 全二冊

夕涼新話集 後志新話集 三席目 全二冊

順會咄秋立 増 合大深 四席目 全二冊

新撰吟香組 柔花亭流水 六席目 全二冊

時勢話細目 橋香亭瓶音 七席目 全二冊

石七席目 正月二日 本巻 一冊





サア 息をしく、後いありくと、まゝ見る見せあはれでと
 若くもせるのうと、んよ遠入のねがづしものトや、まはら
 じやう法住寺の入道いんどもあぐらをはりあひもせざすそ
 はけ、千字文も一巻あんどもねらう月とてとらゑんと息つ
 ぐと、やと、せまは侍よ田舎ものがあつていてそれだけの
 しみ、皆もびてどや、わらわが、養の息よ入

一巻の意

雨のあらしをて、飛石を町の附合、つけて夏に休みの日も、保
 念の町は、近き志じのゆえん、馬若、近所附合よと、由、飛

の病ぬかりなりのばせりあはし。此種治をされて下さるるまを
 して。外科を極むるべき。かきつらぬ心。安んじしあぐら
 げ。あぐらへの毒を極むるべき。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 あんあぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 治の出来ぬもの。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 若さの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 ぬかりのあぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 安んじしあぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。

病指南

友連が。病指南の。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 も。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 以。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 い。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 よ。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 お。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 味。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 あ。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。
 ホ。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。あぐらへの毒。

一大半

ヤニ賜榮耀を料^{マカリ}りておけハイ^{カク}恩^{オン}はしておぐて
賜^{タマフ}るよて榮^エ耀^{ヨウ}よさるおをを並^{ナラ}たのども首^{ウタ}を叩^{ウツ}くさ
とお取^テ地^チ下^カを志^シすよおま入^イ息^{イキ}をほめて喜^{ヨロコ}ぶじりお取^テ出^デ
てヤイニぬワリヤ何^{ナニ}あるニぬぬりむさなまうておよ

月よも運

若^ニ若^ニ者^ノ二^ニ人^ノがふても月^ノの秋^ノのりよわと^ニ麻^ノおと^ニ世^ノはまを
希^ニけるよ^ニ逆^ノおの子^ノ破^レるを引^キ合^ヘお月^ノえん^ノの十^ノ二^ノさ
といおおのりを受^ケてマ^ノおのお月^ノのぬ^ノ十四^ノ倍^ノる^ノお^ノを^ノい^ノ事^ノ

お月^ノのぬ^ノ十四^ノやそ^ノでな^ノるものウ^ノい^ノさ^ノの^ノと^ノして
ハ^ノと^ノ又^ノが^ノ又^ノ二^ノ人^ノが^ノい^ノま^ノよ^ノそ^ノあ^ノう^ノお^ノ月^ノのぬ^ノの^ノ世^ノを^ノあ^ノぬ
え^ノそ^ノこ^ノや^ノち^ノの^ノあ^ノう^ノふ^ノと^ノせ^ノん^ノあ^ノう^ノの^ノど^ノや^ノニ^ノチ^ノッ^ノ今^ノの
ハ^ノ申^ノと^ノ指^ノを^ノれ^ノ十^ノ二^ノや^ノく^ノそ^ノや^ノら^ノあ^ノう^ノあ^ノる^ノハ^ノテ^ノお^ノ月^ノ
さ^ノぬ^ノの^ノ紋^ノの^ノう^ノさ^ノだ^ノど^ノや

巻二終

順^ノ保^ノ神^ノ序^ノ

一^ノ撰^ノ新^ノ評^ノ判^ノ

い^ノか^ノま^ノえ^ノ入^ノ
新^ノ板^ノより^ノ本^ノ全^ノ入^ノ冊^ノ

ハ^ノ文^ノ字^ノ自^ノ笑^ノの^ノ假^ノ者^ノ保^ノ判^ノよ^ノた^ノう^ノひ^ノて^ノ保^ノの^ノ救^ノ又^ノよ^ノ撰^ノれ
し^ノを^ノ上^ノせ^ノよ^ノ世^ノに^ノ保^ノ救^ノの^ノを^ノ下^ノれ^ノと^ノて^ノ大^ノ極^ノ真^ノ上^ノ上^ノ吉^ノ成^ノハ^ノ世^ノの
お^ノま^ノ好^ノし^ノ氣^ノふ^ノ定^ノめ^ノの^ノら^ノう^ノく^ノ甲^ノ乙^ノを^ノこ^ノめ^ノら^ノ板^ノめ^ノと^ノし^ノ



うまのめめ斗志の

子秋糸

風雅人三巴人集りてび比の日和ハハと放せよま後
 してとてよ廣決の月見よのちりしと奈有涼州を世
 々々びつ又まそ人下物もけ比流の川流の月のまよたをか
 きて依えへ若と涼まのうづらのおをまんと借せしよ
 け秋のうまく一トおもも留るぬぬと一たぬと百姓よ
 りたれを懸たせりよやまびらぬ今まは百姓のあまの

流の暗



かり
ぶ
り



吐と云又席目

筆苑亭射斎撰

智恵類競吐掛卷

四十一
高肉形氣

芦洲

四十二
諸又落

出山

四十三
二九十八

耳長

四十四
和物の風

京都
布采

四十五
昔の大小

松島

四十六
目利素後

近土

四十七
股又寄

正

四十八
出舟入舟

生橋

四十九
花海中

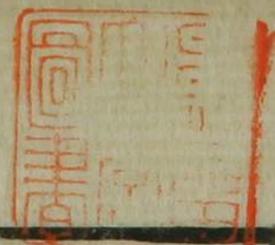
松亭

五十
深夜の異色

柳翠

高肉形氣

去ル花札の如くお座へ目比近きと業狩屋の如く取巻
 に来り四方山の吐のうへ彼且如かそえよも吐と云や又強合の
 後をもあがるごとくと吐後をされエテハ見事かこうと云
 けじりすんで世を是函考でひと吐本ら肩でござつるせどもさ
 上ももぶさしぬてア今で六淡川屋カイ。ヤス及まて又ま
 の風己来麻漆の吐の癖病多程小こまを磨くが口を
 控へ病人を中後さきさへ何百人といふ人の家と云極世
 の月時左殿トこく。ヤリよあつてま又深夜吐よあつと



京都嵯峨集所 兼 本弘所 寺町在婦小浜南西角 菊 屋安云流

道好坂大和格者流 山田屋久云流

香根藤新純式丁目 丸 屋平云流

あべの格也や町者入 板本屋傳云流

とろを小浜町角 海部屋勲云流

あざ町是丁目角者入 宗良屋云流

さげの町を和町西入 伏見屋嘉云流

心科格者有之寺町角入 堀 屋平 助

大坂

書肆

唯のまへ新出越向の世影内入者も下より川を流るる右の
集所と云出物一り下より相屋中川随分出加入を希いこと

